HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	技術社会における人間 ： ヘフナーの共同創造者概念の射程
Author(s)	鶴島, 暁
Citation	応用倫理, 5, 51-63
Issue Date	2011-11
DOI	https://doi.org/10.14943/ouyourin.5.51
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51876
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_tsurushima_oyorinri_no5.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

技術社会における人間
── ヘフナーの共同創造者概念の射程

鶴島　暁（室蘭工業大学）

1．本論文の目的と問題状況

近年の生命医療や生物学分野における科学技術の進歩には目をみはるものがある。遺伝子工学や生命科学に代表される現代科学は、それまで知られていなかった生命の神秘を次々と明らかにしてきた。そうした知見は、多くの益を人間にもたらしてくれたのも確かだが、同時に多くの倫理的問題をも投げかけている。こうした現代遺伝学の諸成果は、人間本性や人間の自由や責任について重要な知見を提供しているが、この種の課題は、キリスト教神学にとり馴染のあるテーマ（人間論）でもある。問題はこの両者の理解が対立しているように見えることにあった。従来の神学的な枠組みでは、今日起こっている問題を適切に論じ、解決に向けての方向性を示すことができないのではないか。それが今日、程度の差こそあれ、多くの神学者たちが広く共有している危機感である。

キリスト教の神は、全被造物を作った創造主であり、それらを支配している主権者である。自然界には、創造のとき、この神によって「固定された秩序」が措定され、人間は他の被造物とは決定的に異なる存在者として、この秩序の中におかれている。そこには、「大いなる連鎖」によって有機的に結び合わされた「存在の階層性」がある。人間は有限な存在であり、罪の影響を受けるが、「神の像」を刻印された存在として、「神よりいくらか劣るもの」（詩篇 8:5）と理解され他の被造物から区別される。そして、人間には、この自然界を神の意志に従って管理することが求められているのである[1]。

だが、近年の遺伝学によれば、人間を他の動物種から区別しうる痕跡は見出し難いし、自然も、人間も、伝統的なキリスト教の主張とは異なり、固定的なものとは考えられず、人間自身も他の動物種同様、長期にわたる進化論的プロセスを経て進化してきたのである。そうなると、伝統的な神学の主張、すなわち人間が「他の動物種とは区別された特別な存在」（人間中心主義）であり、「この宇宙は神の目的に従って支配されている」という主張の意味内容が、再検討されなければならないことになる[2]。また、そもそも人間の遺伝子への介入そのものが、人間という生物種自体を改変する可能性を含意しているとすれば、伝統的な神学にとって、こうした行為自体が、神によって秩序づけられた「固定された自然」（静的な自然）を踏みにじる行為と多くの人々の目には映る。

1　この「存在の階層性」、「存在の大いなる連鎖」については、金の論考を参照［金 2009 100-108 頁］。

2　この問題は、「科学とキリスト教」という枠組の中で、今日盛んに議論されている非常に興味深い問題である。だがここでは、紙数の都合上、この問題を掘り下げることはできない。この問題に関しては、以下のものを参照［McGrath 1999, 2004; Murphy 1990; Polkinghorne 2002; Haught 1995］。

「人間の特権的な地位」を主張してきた伝統的な人間本性理解は、人間と他の被造物との連続性と類似性を主張する科学技術の挑戦を受けることになった［鶴島 2007 13-15 頁］。こうした挑戦に対するひとつの応答が本論で検討するヘフナーの「創造された共同創造者」（created co-creator）である。

本論では、生命・医療倫理や環境倫理とも関わる近年のプロテスタントの神学潮流の中でも大きな影響力を持つルター派の神学者フィリップ・ヘフナー（Philip Hefner）[3]の議論を検討する。今日、とりわけ 1990 年代以降、アメリカを中心に、「創造された共同創造者」は流行といえる様相を呈している。ヒト生殖細胞系列への遺伝子介入やヒト・クローニングといった技術介入の抱える問題に関して、一方では人間本性を変えてしまう可能性に、人間が踏み越えてはならない領域をみてとり、反対を表明するラムゼー（Paul Ramsey）、オドノヴァン（Oliver O'Donovan）、マイランダー（Gilbert Meilander）、キャメロン（Nigel M. de S. Cammeron）といった先端技術に対し極めて批判的な神学思想の系譜がある。他方、人間本性を変えることこそ人間の本質的なありようだとして、この種の技術を積極的に推し進めようとする神学者たちがいる。ヘフナーは、プロテスタント陣営におけるこの種の技術推進論者の急先鋒とみなされている。「創造された共同創造者」概念は、科学技術を強力に後押しする構造をもっているが、ペダーセン（Ann Pederson）、ケースウィンターズ（Anna Case-Winters）、ウィラー（Roger Willer）、ピーターズ（Ted Peters）、ドレース（Willem Drees）、コールターナー（Ronald Cole-Turner）をはじめ多くの生命倫理、環境倫理学者らによって受け入れられ、それぞれの論者に重要な思想的枠組みを提供している。また、米・国家生命倫理諮問委員会の報告書『ヒトをクローニングすること』でも、クローニング論争においてヘフナーの「創造された共同創造者」が人間の自然支配を宗教的に解釈する 3 つの類型の一つに数えられていることも考えると、ヘフナーの議論は無視しえない影響力を持っていることが窺い知れる［NBAC 1997 p.46f.］。従って、神学的技術推進論の範例ともいえるヘフナーの議論を批判的に検討することの意義は大きいと考える。

まずここでは細かい分析に入る前に、ヘフナーの中心的な主張を簡単に要約しておきたい。ヘフナーによれば、神は進化論的なプロセスを通して行為する。人間は、進化論的なプロセスの産物ではあるが、このプロセス自体は神の行為と見なされる。こうした考え方は、科学的な地平で見た際、無目的と見えるが、その背後に、このプロセスを支配している神が存在していることを保証する。そして、神の創造は、「無からの創造」（creatio ex nihilo）ではあるが、神の創造行為は、今日まで継続している。つまりそれは「継続的創造」（creatio continua）という神の行為である。また、我々人間は新しいものを生み出すことが許されるし、また自然を神の意図に従って改変することも許される。否、むしろ積極的にそうしなければならない。なぜなら、人間の創造は、神の創造と結び合わされ、自然を改変する我々人間の行為は、その都度の正当化を神から得ることになるためである。ヘフナーは言う。神の意図は、我々人間が「我々を生み出したところの自然にとって、もっとも健全であるような自由を生み出すべく、自由に行為すること」［Hefner 1993

3　ヘフナーは、現在シカゴ・ルター派神学校の組織神学名誉教授で、1988 年から「宗教と科学のシカゴ・センター」（Chicago Center for Religion and Science）（後に「宗教と科学のザイゴン・センター」（Zygon Center for Religion and Science）と改名）の初代センター長に就任。『ザイゴン―宗教と科学』誌（*Zygon: Journal of Religion & Science*）の編集に 2008 年まで携わる。

p.27］にあるのだと。以下では、このヘフナーの主張を人間生成、テクノ・ミラー、自由と想像力、物語論といったいくつかの中心的主張や概念にそって検討する。

2. ヘフナーの創造された共同創造者

2-1　人間生成

ここではまず人間の自由を重視するヘフナーの議論の構図を考察する。ヘフナーは、1993 年に著書『ヒューマン・ファクター』［*Human Factor,* 1993］で、人間本性を叙述するために「創造された共同創造者」（created co-creator）という定式を考案した［Hefner 1993 pp.236f.］。その後、創造された共同創造者という概念は、アメリカの神学者たちを中心に、生命倫理や環境倫理の議論の中で広く用いられるようになる。ヘフナーは「共同創造者」として人間を把握することで、現代科学、とりわけ遺伝子工学の問題を適切に取り扱うことのできる枠組を確保しうると考えたのだった。ヘフナーの主要な関心事のひとつは、神学と現代科学の関係を対立モデルで考えるのではなく、神学を現代科学に関連付け、科学をキリスト教神学の対話のパートナーと見なすことにある[4]。こうしてヘフナーは、プロセス神学に依拠し、神と自然との動的な関係の中で、この人間本性を再考し、「創造された共同創造者」という定式を引き出すに至る。

プロセス神学とは、神と世界の非常に緊密な関係性を主張するアルフレッド・ノース・ホワイトヘッド（Alfred North Whitehead）に由来する神学思想である。ホワイトヘッドは、『過程と実在』（*Process and Reality* 1929）の中で、実体（substance）や本質（essence）といった静的概念に依拠する伝統的な神学的、哲学的立場を批判し、世界を相互に複雑に絡み合うひとつの有機体として提示してみせた。世界は、固定的な実体の寄せ集めではなく、「現実的実質」（actual entity）や「現実的契機」（actual occasion）からなる。こうして世界は静的ではなく、流動的な生成変化という特徴を持つことになる。世界を構成している「実質」や「契機」は、自然必然性にしばられながらも相互に影響し合い、発展する自由を有する。ホワイトヘッドは、電子や原子といった物理的存在や無機物をも生体と同様に「有機体的統一体」（organic unity）とみなし、全宇宙がこの「有機体」の生成・変化の過程を経て発展すると主張する。被造世界内部におけるこうした発展は、実質間の精神的、物質的相互作用を通じて達成されるわけだが、この相互作用を織りなすものが、「影響」（influence）と「説得」（persuasion）である。そして神でさえもこうした影響と説得から完全に自由なのではない。神はこの世界に説得という仕方で関与できるだけであって、しかもそれは、被造世界における過程そのものが持つ様々な諸制限の内部でという条件付きである。神は、こうして世界に影響を与えるわけだが、神自身も他の存在からの、すなわち世界からの影響を被る。

これが、ホワイトヘッドの主張するプロセス思想の概略であるが、このプロセス思想は、その後、チャールズ・ハーツホーン（Charles Hartshorn）、ピエール・テイヤール・ド・シャルダン（Pierre

4　ヘフナーのように、科学とキリスト教の関係を相関モデルによって分析し、両者の緊密な関係性を確証している論者は多い。オードリー・チャップマン（Audrey Chapman）やテッド・ピーターズ（Ted Peters）、ジェームズ・ガスタフソン（James Gastafson）といった生命倫理でも積極的に発言している神学者をはじめ、アリスター・マクグラス（Alister McGrath）のような自然神学の構築という文脈の中で探求する人々、或はまた、ジョン・ポーキングホーン（John Polkinghorne）、ナンシー・マーフィー（Nancey Murphy）といった科学哲学に従事する神学者に至るまで数多く存在する。

Teilhard de Chardin)、シューバート・オグデン（Schubert Ogden)、ジョン・カブ（John Cobb）といった神学者たちの手によりさらなる発展を見る。これが、プロセス神学と呼ばれる神学潮流である。プロセス神学に特徴的なのは、その名のとおり、世界における神の活動を「プロセス」における影響という仕方で確保できる点にある。そして、このプロセスは、進歩と発展としてしばしば記述される。こうした洞察が、先に見た進化論に対する明瞭な応答になっていることは明らかである。つまり、進化のプロセス自体も神の行為とみなされるということ。そして、この進化のプロセスの中には、人間も含まれるため、特権的な地位に置かれた人間という静的な人間観を動的なものへと修正することになる。そうすることで、人間中心主義という批判の鉾先をかわすことがプロセス神学の目論見であった[5]。

このホワイトヘッドのプロセス思想に依拠し、ヘフナーは人間が「常になりつつある存在」として、プロセスの中に置かれたものと理解し、それを「人間生成」(Human becoming）と呼ぶ。ヘフナーが、「人間になる」(Becoming human）ではなく,「人間生成」(Human becoming）という言葉を選んだことには特別な意味がある[6]。それは、彼自身ことわっているように、「人間になる」(Becoming human）だと、「人間であること（being human）が最終的な目的地」であり、「ついには人間である（being human）と呼ばれる地点に到達」するかのような誤解を与えかねない。そうではなく、人間は、「常に」宗教的、霊的にも変化してゆくプロセスの中で「成る」(生成する）存在なのである［Hefner 2003 pp.5f.］。つまりそれは、人間を静的 / 固定的なものではなく、動的 / 流動的なものとして把握することを意味する。これがヘフナーのとる基本的な人間理解の概要である。

2-2　テクノ・ミラー

ヘフナーに特徴的なのは、前節で確認したように、「人間生成」という動的な人間理解に加え、技術と人間の関係を存在論的に規定し、技術をも人間を取り巻く「宗教的・霊的現実」［Hefner 2003 pp.5f.］として積極的に把握している点にある。そこで本節以降では、ヘフナーの大きな特徴とも言える、技術の問題を検討したい。ヘフナーは次のように言う。

> 「技術の外側は、我々の内側である、ちょうど内側が外側であるように」［Hefner 2003 p.19, p.74］

ヘフナーによれば、技術は、我々の精神や身体と混然一体となるほどに我々の日常に深く浸透しているため、技術をもはや「我々の文化の外側での現象」と呼ぶことはできない。むしろ技術は「我々の文化の次元」そのものであり、我々人間は、切り離しがたく技術と結び付いている［Hefner 2003 p.21］。ヘフナーのこうした主張は、実在を有機的なプロセスとみなすプロセス神学

5　とはいえ、プロセス神学に何ら問題がないわけではない。むしろ、大勢のキリスト教神学者、とりわけ伝統的な神学的立場からは異端視される傾向にある。この問題については、後に本文で触れる。

6　ここでヘフナーが言及している「人間生成」(Human becoming）という言葉は、ピーターズや金森によれば、カトリックの神学者カール・ラーナー（Karl Rahner）も用いている言葉である［Peters 2003 p.145; 金森 2005 235 頁］。ラーナーは、「生成」(becoming）という観点から、人間という種の生物学的歴史を進化論の観点から記述する。人間は、単なる物質的自然（material nature）の観察者というだけではない。人間の歴史は、技術を用いて「物質的な自然そのものを積極的に改変」する歴史でもあるとするラーナーは、この技術による改変の対象に人間自身をも含める。

という枠組であればこそ可能となる。それゆえ、技術が我々自身を映し出す鏡としての役割をも担うことになる。そこで、この技術との関連で、人間本性がどのように理解されているか、という問題が、次に問われなければならない。

ヘフナーは、技術という我々を映し出す鏡を「テクノ・ミラー」（技術の鏡、Techno-Mirror）［Hefner 2003 p.28］と呼び、そこに以下の4つの人間像を認める。

1）テクノ・ミラーは、技術が我々自身のために用いられることを示しており、我々が欲したことを映し出す鏡である。すなわち我々の生存や我々の快のために、技術を用いているという事実を反映している［Hefner 2003 p.34］。
2）テクノ・ミラーは、我々人間が、有限で、はかなく、死ぬべき運命に定められた存在であることを示す。我々はこうした有限性を補填するために個々の技術を生み出し、技術は人間の有限性を補填する装置として機能する［Hefner 2003 p.35］。
3）テクノ・ミラーは、我々人間が、今現在住まう世界とは異なる代替世界を存在へと至らしめるために、技術を生み出すことを示している［Hefner 2003 p.39］。
4）テクノ・ミラーは、我々人間が、こうした新しい諸現実を創造することに奔走しているにもかかわらず、我々はそのような現実をどのような価値に従って生み出しているのかを知らないということを示している［Hefner 2003 p.40］。

人間の有限性を克服し、人間に快をもたらすために、人間は技術を用い、自らの生存を確保しようと企てる（1、2）。こうして、それまで存在していなかった「代替世界」を現実化する役割を技術が担うことになるが（3）、技術そのものは、代替世界を生み出すにあたり、その世界の善し悪しについての道徳的基準を提示してはくれない（4）。こうして技術は、人間を様々な道徳的ジレンマの前に放り出してしまうために、有限性や死の問題、生きる目的や何が正しく何が誤りであるのかという道徳の問題を提起することになる。ヘフナーの言葉を借りれば、技術は「我々人間の旅路の絶え間なきあいまいさ」を強化することになる。

ヘフナーは、我々が有限で、はかなく、いつかは死ぬということに技術は深く関わると述べていた。だが、それまで存在していなかったものを存在へと至らしめる技術の推進力、ヘフナーの言葉を借りれば「代替世界を存在へと至らしめる」動因、並びに代替世界の善し悪しを識別する基準を、技術それ自体は何も提供してはくれないのだ。

2-3　人間の自由と創造力

ヘフナーにとり、この技術を押し進める動因となるのが、人間の「自由」と「想像力」である。これはヘフナーの人間本性（human nature）理解にとって、重要な鍵となる概念である。ヘフナーにとり人間の有限性を拒否するための戦略としての技術は、有限性と死を超越する手段でもあることは先に言及したとおりである。この技術は、それまで存在していないものを想像することができる人間の想像力（imagination, imagining）において超越という形態をとる。この拒否と超越の境界を見定めることは困難であるが、おそらくこの両者は同じ一枚のコインの両面のようなものである。つまり何かを拒否するということは、それを超越するための前提なのである。この拒否と超越という仕方で具体化する人間の想像力は、人間の自由を根元的に規定する。だがヘフナーが言う自由とは、制限や束縛からの自由ではない。

「むしろこの自由は、想像力、すなわち現実的でないものを想像し、そうした想像力を真剣に受け取る能力によって規定される」［Hefner 2003 p.52］

「重要なことは、人間が、この想像力、或は霊性（spirituality）によって規定されており、自由はそれにより規定されているということである。また今や我々は、技術もまた現実的なものと現実的な状態とが成りうるものを想像的に（imaginative）精査することによって、すなわちそのことを信じ、そのことの上に立ち行為することによって規定されていることを知っている。それが真の霊性である」［Hefner 2003 pp.52f.］

つまり、ヘフナーにとり、技術を押し進めようとする動因が、人間の持つ想像力であり、それは人間の自由によってつき動かされる。ヘフナーの言う自由とは、制約や制限からの自由ではなく、「現実にないものを現実化する」ことに関わる。こうして、技術は、人間のもっとも深い内奥である「霊性という領域」で把握されなければならないとヘフナーは主張する。だが、ここで「霊性」に言及するヘフナーの議論は、一見、唐突とも奇妙とも見える。そこでこの「霊性」、或はまた「宗教」との関連については、以下でヘフナーの物語論的アプローチを取り上げた後に、再度立ちかえることにする。

2-4　ヘフナーの物語論的アプローチ

さて、ヘフナーによれば、存在していないものを想像し、現実化されていないものを信じるという技術を生み出す我々の想像力は、夢や物語（narratives、stories）という形態をとる。それは、「現実的なもの（actual）の可能性についての物語」であり、「現在が成りうるところのものについての物語」である［Hefner 2003 p.60］。

だが、この物語は、特定の技術を生み出す行為に対し、一対一に一義的対応関係を持つものではない。それは、各々の科学者や技術者が、各々固有の物語を持ちつつ、同じ研究に従事しうることを意味する。たとえばヒトゲノム解析研究に従事したフランシス・コリンズ（Francis Collins）とクレイグ・ベンター（Craig Venter）の場合を考えてみよう。敬虔なキリスト者でもあるコリンズにとって、この研究プロジェクトは、人間に奉仕し、そうすることで神の目的に奉仕する物語という文脈の中で遂行される。他方、ベンターの物語を構成するのはビジネスや市場経済という文脈である［Hefner 2003 pp.61f.］。ヘフナーがこうした議論を通じて主張したいことは、研究に従事する当事者本人が意識していようといまいと[7]、物語が技術開発や研究にとり不可欠であるのみならず、技術の使用用途や目的をも規定している点である。ヘフナーは、そうした物語なしには、いかなる科学的発見もありえないとさえ主張する。

「我々が技術の意味についての物語…（中略）…或は技術的文化における人間の意味についての物語に依存していることは重要である。我々は技術を持ち、我々は本性（nature）や人間経験のより広大な世界を持つ。我々がこれらの世界をまとめることができないかぎり、我々は意味を持つことがない。夢や物語や想像なしには、我々はこれらの世界をまとめることが

7　ヘフナーはこうも述べている。「こうした科学者自身の物語を語るのは、科学者ではなかった。こうした物語を語るのは、社会、つまり我々自身であった。この物語は、技術を文脈化する我々の手段なのである」［Hefner 2003 p.63］

できない」[Hefner 2003 pp.64f.]

ここにはヘフナーが主張する物語の重要な役割が開陳されている。つまりそれは、物語が意味世界を構築し統合するための必要不可欠の要素とみなされているということである。だからこそ、意味世界を統合する役割を担う、ヘフナーの言うところの「物語」は、特別な拘束力を持ち、そうであるがゆえに物語は技術から分離しえず、技術の目的と使用用途を規定することになる[8]。

物語が、我々にとっての意味世界の構成と不可分に結び付いているというヘフナーの主張から当然予想される事であるが、物語は特定の技術を用いる際の正当化の文脈をも構成する。つまりそれは、物語が「特定の技術の使用が望ましいか望ましくないか、善か悪かということ」[Hefner 2003 p.63]を判断する基準としても機能することを意味する。

ここまで、駆け足でヘフナーの物語に関わる議論を見てきたが、ここでヘフナーの物語論的アプローチとでも言うべきものを簡単に要約し整理しておきたい。ヘフナーにとり、物語が技術との関連で担う第一の主要な役割は、我々にとっての意味世界を統合的に構成することに関わるということである。またそうであるがゆえに、この物語には研究・開発や事実認識、また特定の技術の使用用途や正当化の文脈、すなわち善悪の諸観念や道徳的・倫理的な判断基準までをも提供することが期待されている。技術はヘフナーにとり「我々の外側」の現象なのではなく、我々自身の内奥に分かち難く織り込まれているために、技術と不可分の関係にある「物語」は人間の「深み」をも規定することになる。

2-5　技術と宗教 ──「神の像」再考へ

前節では、ヘフナーの物語論的アプローチを概観したが、ここで、先に留保していた技術と宗教とのつながりに触れておこう。「生の深み」において人間は絶対者なる神に関わると考えるヘフナーは、この「深み」に宗教の場所を見出す。なぜなら、ヘフナーにとり、宗教とは人間が絶対者と出会う場所であるからだ。こうして、人間の生の深みを規定する物語は、我々の意味世界を形成する役割を担うわけだが、ヘフナーにとり、この役割は宗教の重要な機能でもある。先に述べたように、ヘフナーは技術との関連で霊性や宗教に言及している。その理由は、技術が人間の「生の深み」を規定し、技術に付随する物語が、我々に意味世界を提供するからである。ヘフナーが技術を霊性や宗教と躊躇なく関係付けることができるのは、そうした認識があるからこそである。

「もし我々が、そのもっとも深いレベルで技術について語るなら、たとえ、慣習的な宗教の用語を用いていないときでさえ、我々は同時にその宗教的次元について語っているのである」[Hefner 2003 p.73]

「我々が新しい可能性へのこの推進力に参与しているとき、我々はまた神に参与しているのだ。これが技術における聖性の次元である」[Hefner 2003 p.83]

8　こうした物語の強調には、ポストモダン的な思想潮流の影響が認められる。そのため、自らの主張が事実にのみ立脚していて欲しいと願う人々、すなわちポストモダンから意識的に距離を置こうとする人々（科学者や技術者たち）からの反論に出会うことになる。こうした批判に対し、ヘフナーは、ラカトシュ（Imre Lakatos）やクーン（Thomas Kuhn）の議論を援用し、「我々は、事実と物語を同一の衣服に編みこんでおり」、両者を分離することもできないと反論する[Hefner 2003 p.69]。

ヘフナーにとり、人間の自由と想像力を推進力とする技術を「真剣に」考察するとき、それは同時に、人間本性の宗教的次元、人間の自己超越に関わる問題を探求することを意味する。技術とは不可分な物語の性格からして、技術は自己理解をもたらす媒介物ともいえる。これが、ヘフナーにとっての技術において宗教がとる新しい形態であり、「人間生成（human becoming）におけるもっとも重要な発展の宗教的、或は深みの次元」［Hefner 2003 p.76］なのである。だが、技術の持つ宗教的次元において確保される人間理解についてはよいとしても、ここで問題となるのは、物語の質である。

物語は我々の意味世界を構成し、我々が生きていく上で必要不可欠なものとされるが、ヘフナーは、ひとつの行為に対し、多くの物語が併存しうることを認めている点は先に触れた。この物語が、事実認識のみならず、使用目的や特定の技術の適用にまつわる道徳的文脈をも規定しているのだとすれば、どの物語がより優れているのかという、物語の質を識別するための基準がなければならないことになる。

> 「伝統的な宗教は、場所によっては、現代科学的な世界観に取って代わられるかもしれないが、神秘的な深みを持つ物語を生み出す宗教の機能は代替不可能であり続ける。問題は、伝統的な宗教によっておきざりにされたこの穴をどの世界観が埋めることができるのかということである」［Hefner 2003 p.70f.］

ヘフナーは、伝統的宗教が、今日の技術社会において、説得的な世界観を提示しえない可能性を承認してはいるが、「深み」のある物語、すなわち意味世界を構築する上で優れた物語を紡ぎ出すことができるのは、宗教だけであるとも主張する［Hefner 2003 p.70f.］。ヘフナーが言うように、物語が技術の正当化の文脈をも規定するならば、物語の質を見極める基準の探求こそが、重要な課題とならねばならないはずである。「どの世界観が」という仕方で、物語の質の問題を提起するヘフナーは、伝統的神学の行き詰まりと、技術との関連で神に創造された人間の教理、すなわち「神の像」（image of God）解釈の再考を促す。

この問題に対するヘフナーの解決は、いくつかの大胆な主張を含む。ヘフナーは、技術を自らの本性に抱えこんでしまった人間、すなわち今日の技術社会に生きる人間を「テクノ・ヒューマン」（Techno-human）、「サイボーグ」（Cyborg）、或は「テクノ・サピエンス」（Technosapiens）といった用語で規定する。それは、「人間本性内部における技術本性（techno-nature）の次元を表明する比較的最近の用語」［Hefner 2003 p.74］であり、「有機的で技術的な被造物を指す言葉」であり、今日における「宗教の形態」を記述する用語であるとヘフナーは言う［Hefner 2003 p.75］。宗教言説に即して言うなら、技術は「創造であり」、「聖なる場所」（sacred place）であり「神と出会う場所」であり、人間がサイボーグであるとは、この意味で「神の像に創造され」ていることを意味するのだと。そのため、技術を「進化の新しい段階」と呼ぶヘフナーは、サイボーグである人間にとり、技術は「神の像の器」であるとまで主張する［Hefner 2003 p.77］。

ヘフナーは、人間を想像力と自由に依存した存在者として描き出してみせた。人間は、まだ存在していないものを技術によってつくり出すことにより世界を新たに創造するのみならず、こうした世界の意味、目的、また善悪という観念をも物語を通じて創造する。「創造された共同創造者」

としての人間について語ることによって、ヘフナーは自己超越する人間本性の次元を捉えようと腐心している。これがヘフナーが技術を宗教的・神学的に解釈するときの基礎であり、「創造された共同創造者」が含意する人間理解の概要である。

3. 共同創造者概念の抱える5つの問題点

共同創造者概念を用いる論者の多くは、ヘフナーも含め先端技術の適用を積極的に押し進めようとする論者が多い。ヘフナーにせよ、ピーターズにせよ、具体的な個々の問題を考察するにあたり、キリスト教的な隣人愛に訴え、神に委託された賜物 ── すなわち、科学技術、医療技術 ── を用いるべきであると主張する。そうすることを神が人間に期待していることだと論ずる。彼らは人間の自由と責任ある応答を強調することで、人間は神と共なる共同創造者としてこの世の事業に取り組むと考えている。そして、生殖細胞系列への遺伝子介入であれ、DNAを改変し人間本性を変えることになるかもしれない技術の適用であれ、それらを皆許容し、時には、積極的に唱導する。その道徳的な根拠は、神からその都度与えられる。つまり、こうした行為は、人間の行為であると同時に、隠れたる神の神的顕現としての行為であり、その都度の正当化を神から得ることになる。

ヘフナーの議論は、刺激的であり、技術を積極的に神学と関係付けようとする努力は、相応に評価しうる。ヘフナーの議論が、進化論や遺伝子工学に代表される現代科学とうまく調和することは言うまでもない。また技術の問題を人間本性の内部で分析し、自由と想像力という自己超越性を技術との関連で神学的人間学の課題に押し上げ、技術の問題に神学者たちの注意を喚起したことは、ヘフナーの独創的な貢献と言ってよい。また「創造された共同創造者」という簡潔な定式は、多くの人々の目には、非常に魅力的なものと映る。だが、それにもかかわらず、ヘフナーの議論には、いくつもの大きな欠陥があるのもまた事実である。以下では、ヘフナーの問題を5つ指摘し本論のまとめとしたい。

まず第一に、ヘフナーが依拠するプロセス神学が、キリスト教からの大きな逸脱ではないかという嫌疑にさらされていること。ヘフナーに限らず、共同創造者概念を擁護する人々は、プロセス神学に依拠する傾向がある。それは、ピーターズやウィンターズのように、プロセス神学の立場をとっていることを「明言しない人々」にも妥当する[9]。ここではプロセス神学の二つの問題点を指摘しておきたい。まず一つ目は、プロセス神学が主張する神概念が、伝統的に神に帰せられてきた「全知」、「全能」、「普遍」、「不変」といった属性と矛盾しているように見える点である。もう一つはプロセス神学が前提としている進歩思想に関わる問題である。ヘフナーのアプローチの一つの大きな利点は、進化論に代表される科学的知見との調和に見出される点にあったが、それはヘフナーが依拠するプロセス神学が、「進化」に関する肯定的な前提、すなわち「進化が合理的で進歩的だ」という前提を抱えこんでいることと密接に関係する。この前提から人間の文化や

9　たとえば、ピーターズが次のように主張する際、プロセス神学の要素が明瞭にあらわれる。「自然（nature）の善は動的な善として、すなわち善の探求が神的に霊感されたプロセスであるところの自然の歴史に属するものとして理解されるべきである。自然を善の存在論的源としてのみ見るのではなく、我々は贖罪的で創造的な仕方で与えられている善の源として神を見る必要がある。自然からの自由を追い求めるのではなく、創造された共同創造者は自然の将来のために自然の内部で責任を負うことを探求する」［Peters 2003 pp.198f.］。

人間の自由の実践についての楽観主義的な理解がもたらされる。だがこうした進歩思想は、人間の人間中心主義的希望によって育まれた幻想にすぎないように思われる。

第二に、ヘフナーの人間観は、非常に楽観的であり、現実の人間に即応していないのではないかという問題である。ヘフナーは、人間を「我々が現れ出てきたところの自然と自然を改変する技術を統合する被造物」として理解していた。その際、技術は人間の自己超越の発露とみなされ、技術を推進する「実際には存在していないものを想像し創造する」人間の想像力と自由を強調していた。技術的発展を積極的に押し進めることは、人間の自己超越の重要な形態であり、この観点から人間本性が宗教的にも規定される。こうして技術は「聖なる領域」とみなされ、技術的発展を積極的に押し進めることの中に、人間の本来的な姿を認める。こうしたヘフナーの議論は、一方で、技術を押し進めようとする人々にとり、自らの研究を後押しする強力な動機付けを与えてくれることは言うまでもない。だが問題は、ヘフナーの共同創造者概念が、実質的には、どのような倫理的問題であれ、技術の進展によって回避し、或は解決しうるかのような楽観的な主張に導かれる点にある。

第三に、ヘフナーの議論からは、道徳問題を扱う際、いかなる規範的命題も引き出すことができないことである。ヘフナーは、人間にとっての自己超越の契機としての技術や意味世界を構成する物語の役割について論じてはいるが、それらは、どこまでも「記述的」であって、規範的ではない。仮に規範的命題をヘフナーの議論から抽出しうるとすれば、それはせいぜい「技術に聖性を帰せ」という以上のものではないように思われる。確かにヘフナーは、特定の技術の適用の是非を主張してはいるが、そこでは、個々のケースの道徳的是非の実質的な判断基準は、リスク-便益分析を用いた功利主義的価値判断であるように思われる[10]。つまり、ヘフナーの「創造された共同創造者」概念から、直接、何らかの規範が引き出されるわけではない。

第四に、物語の質に関わる問題を指摘しておかねばならない。この問題は、先に指摘した第二、第三の問題点とも関係するが、具体的な道徳問題を取り扱おうとする時、露見する。ヘフナーは、技術の正当化の文脈を物語が規定していると述べているが、我々が生命倫理や環境倫理の問題において知りたいことは、ヘフナーの言葉を借りれば「どの物語を選ぶべきなのか」という物語の質に関わる問いである。ヘフナーはこの問題に、宗教が重要な貢献をなしうると示唆しているが、それ以上のことは語っていないように思われる。ヘフナーのように技術を神聖視する態度は、「できること」は「やるべき」という無責任な科学主義、楽観主義に陥る危険性を常にはらんでいる。しかも、「技術は我々の自己超越を構成する想像力の自由に関わる」ために、「技術はそれ自体、神の行為の媒介」でもある［Hefner 2003 p.89］。また技術は「根源的に自己超越する神の実在の表現」［Hefner 2003 p.87］でもあるのだから、このことは、個々の技術が、人間の行為でありながら、神の行為でもあり、その都度の正当化は、究極的には神によって与えられることを意味する。たとえばギルキー（Langdon Gilkey）は、ヘフナーの「共同創造者」概念は、部分的には 19 世紀の自由主義的進歩思想の焼直しだとして、ヘフナーが罪の問題を適切に取り扱っていないと批判する［Gilkey 1995 p.299, 307］。ヘフナーに従えば、人間の創造行為を通して、神の創造行為が顕現するわけだが、そのような考え方は、「神と人間との無限の質的差異」（カール・バルト）を解

10　紙数の都合上、この問題についての立ち入った考察は、別の機会に譲りたい。

消し、人間を神格化してしまうことに繋がる[11]。こうした観点から批判する論者たちは、ヘフナーの共同「創造者」（creator）を不適切なものとして退け、人間は「操縦者」（manipulator）であって「創造者」ではない、「下僕」（servant）であって「共同者」ではないと主張する［Willer 2004 pp.846f.］。

さてヘフナーの枠組では、人間の行為の正邪を識別する批判的機能は物語に帰せられるべきはずのものだが、当の物語自体が「人間の有限性」を拒否し、代替世界を現実化する自由と想像力が具体化したもの、つまり技術を押し進めようとする人間の欲求が具体化したものであることに注意しなければならない。そのため、この物語に「神の行為の媒介」である技術を抑制する批判的機能を期待すること自体、極めて困難であると言わざるをえない。

ヘフナーの問題点の五つめは、人間中心主義に関わる問題である。ヘフナーは、共同創造者概念を持ち出すことで、伝統的なキリスト教神学が抱えこんでいた人間中心主義を克服すべく腐心している。この点に関するキリスト教陣営における神学的再考が、環境倫理との関連で管理責任概念[12]を神学的主題に押し上げたわけだが、ヘフナーらをはじめとする共同創造者概念を擁護する論者は、管理責任概念によって人間中心主義を十分に回避しうるとは考えていない。この論点が、ヘフナーをして共同創造者概念を生み出さしめる大きな動機の一つとなっている。だが、ヘフナーの目論見が、本当に成功しているかどうかは疑わしい。ヘフナーは、我々の使命はこの地球という惑星を神の意志に従って形成していくことにあると言い、このことは技術を媒介して、人間に対する神の意志として知られると主張する。人間は、創造主のプロセスに参与するが、その妥当性を人間は自力で正当化することはできない。

> 「人間は、同一のエコシステムの中で、他の種や存在物よりも道徳的に優れていたり、劣っていたりすると言うことはできない」［Hefner 1993 p.36］

ヘフナーはこのように主張することで、人間はいかなる特権的地位も与えられておらず、他の被造物と変わらぬ存在であると言いたいのだ。こうして、彼は人間中心主義を乗り越えられると考えている。だが、この人間の道徳的地位に関するヘフナーの考察は非常にあいまいである。

一方で、ヘフナーは、人間は進化論的プロセスという観点から特別な存在ではないと言うが、他方で、人間は共同創造者である自由をあたえられており、このことがこの世界における人間の独自の貢献を特徴づけているとも主張している［Hefner 1993 p.165f.］。もしそうだとすれば、人間は、この意味で、地球上の他の被造物からは決定的に区別された特別な地位と役割を担っていることになる。そうなると、ディーン・ドラモントも指摘しているように、結局、ヘフナーが拒否しようとしていた人間中心主義に逆戻りしてしまうのではないだろうか［Deane-Drummond 2006 pp.37f.］。

こうした反論に直面したためか、先に言及した著書を出した10年後、ヘフナー自身、「共同創

11　ヘフナーの考え方は、人間を神と対等の地位に置き、人間の創造性を過大評価しているとしばしば批判される。だが、ヘフナーは「創造された」（created）共同創造者と言うことによって、人間も神に造られた被造物であることを強調しており、人間の神格化に陥ってはいないのだと、ヘフナーを擁護する論者もいる［Peters 1998 p.33; 2003 pp.16f.］。

12　stewardship。伝統的な神学の枠組みの中で、神に委ねられた被造世界を適切に管理することが人間に求められているという点を強調する概念［鶴島 2007 24-25頁］。

造者」という人間理解は、「人間中心的な読みであろうか?」と問い、ただちに「もちろんそうだ」と答えている［Hefner 2003 p.76］。ヘフナーは、技術の登場によって、人間は、「自然と技術の両方から人間を分離していた壁を壊し、今や我々はこの境界を越えているのだ」と述べ、それに続いて次のように主張する。

「人間はかつてそうであった人間とは違う、そのため人間中心主義は（かつてのそれと）同一ではない。宗教はまた自然の宗教である。我々がユダヤ・キリスト教的、イスラム教的な用語で語るなら、我々は技術が創造であり、サイボーグは神の像に創造されていると言わなければならない。…（中略）…技術は今や進化の新しい段階であり、それは今や創造であり、神の像の器なのである」［Hefner 2003 pp.76f.］

こうしてヘフナーは、自らの戦略を「人間中心主義」としてしぶしぶ認めつつも、それは「旧来の人間中心主義」とは異なると、なおも抵抗する。それは、技術の登場によって、人間の自己超越する具体的契機を与えられ、技術がもはや人間とは切り離しえない「サイボーグ」としての人間に関わる「人間中心主義」であって、この点で、旧来のそれとは異なると主張したいようである。だがこうしたヘフナーの主張も結局のところ、先に提起した人間中心主義の問題を解決することにはならない。仮にヘフナーの主張を認めるとしても、技術の登場以前の人間と区別された今日の技術社会に生きる「サイボーグ」が、他の被造物とは異なる「価値創造」という特権の担い手である事実はヘフナーも認めるところであるからだ。それはつまり、「サイボーグ中心主義」とでも呼ぶべき事態と言えよう。従って、ヘフナーの共同創造者概念、すなわち、人間の能力と目的を自然の目的と密接に関係付けるというやり方は、結局のところ、人間中心主義への回帰という危険を犯していると結論付けられる。

4. まとめ

以上、現代科学が明らかにしてきた知見がキリスト教神学につきつけてきた挑戦を受け、ヘフナーがどのように応答しているかを考察してきた。ヘフナーの試みは、こうした自然科学の営みや知見と調和的であり、また彼のいくつかの主張はきわめて興味深い。とはいえ、前節でも指摘したように、これで問題がすべて片付いたわけではない。こうした神学的な試みによって、現代の科学技術の知見を積極的に評価する視点を確保することはできた。だが、問題はその先にある。つまり、特定の技術を現実に適用しようとする際問われねばならないのは、どのような介入は許容され、どのような技術の適用は拒絶されるべきなのかという判断基準を明らかにすることである。既に指摘したように、ヘフナーにとり、こうした判断規準を提供するのは、物語の役割であったが、その物語は個々の共同体や個人にゆだねられており、いくつもの物語が併存可能であった。そこで問われなければならないのは、「どの物語が道徳的に妥当か」ということであるが、ヘフナーはこの問いに答えていない。つまり、ヘフナーの枠組みでは、特定の行為の善悪を判断する

倫理規範を与えることができないという問題が浮き彫りとなった[13]。

この問題は、「神の意志」を、生命・医療倫理や環境倫理問題の中でどのように把握するかという問題とも関連している。神の意志をどのように把握するかが、道徳判断の大きな要となっており、高慢と責任との関係を問うとき、この道徳判断の基準に関わる問いは先鋭化する。他方、特定の先端技術の適用を巡る問題において、「自然」と技術の関係は重要なポイントとなる。というのも技術をどのように「自然」との関連で把握するかが、先端技術を受け入れるか否かという基本的態度に影響する。ヘフナーの場合、自然を改変し、いわば外部にあった自然を技術によって、かつ技術も含めて人間本性（human nature）に内在化してしまうことで、原理的に個々の技術の適用を積極的に肯定してしまうという議論の構図をとっていた。ヘフナーの例は、いささか極端な主張であり、技術の適用を巡る道徳判断としては、不十分と言わざるをえない。だが少なくとも、自然と技術との関係をどのように把握するかという問題は、特定の技術の適用を巡る問題を考察する上では、重要であるとは言えよう。

文　献

Deane-Drummond, Celia E. *Genetics and Christian Ethics*, Cambridge University Press, 2006.

Gilkey, Langdon 'Evolution, Culture and Sin: Responding to Philip Hefner's Proposal,' *Zygon*, Vol.30, No.2 (June 1995), pp.293-308.

Haught, John, F., *Science and Religion: From Conflict to Conversation*, Paulist Press, New York, 1995.

Hefner, Philip *Technology and Human Becoming*, Minneapolis: Fortress Press, 2003.

——— *The Human Factor*, Minneapolis, Fortress Press, 1993.

McGrath, Alister E. *The Foundations of Dialogue in Science and Religion*, Blackwell Publishing, 1999.

——— *Science and Religion: An Introduction*, Blackwell, Oxford, 1998.

Murphy, Nancey *Theology in the Age of Scientific Reasoning*, Cornell University Press, 1990.

National Bioethics Advisory Commission, *Cloning Human Beings*, US Government Printing Office, Washington D.C., 1997.

Peters, Ted *Playing God?: Genetic Determinism and Human Freedom*, Routledge New York and London, 2003.

——— 'Science and Theology: Toward Consonance,' in: Ted Peters (ed.) *Science & Religion: The New Consonance*, Westview Press, 1998, pp.11-39.

Polkinghorne, John R. *Traffic in Truth -Exchanges between Science and Theology*, Fortress Press, 2002.

Willer, Roger A. 'Created Co-Creator in the Perspective of Church and Ethics,' *Zygon*, Vol.39, No.4 (December 2004), pp.841-857.

金森修『遺伝子改造』、勁草書房、2005 年。

金承哲『神と遺伝子 ── 遺伝子工学時代におけるキリスト教』、教文館、2009 年。

鶴島暁「生命倫理とキリスト教思想における人間理解」『哲学年報』、北海道哲学会出版、第 54 号、13-28 頁、2007 年。

13　ヘフナーが「共同創造者」を論じている『ヒューマン・ファクター』［Hefner 1993］でも、人間の持つ「自由」が強調される一方、自由が誤用される可能性や責任についてはほとんど語られていない。ウィラーは、ヨナス（Hans Jonas）の責任概念を取り込むことでヘフナーのこうした難点を避けようと試みている［Willer 2004 pp.854］。